

天橋立くっきり

神秘的ムード 夜空焦がす

天橋立

日本三景の一つ、宮津市の天橋立を二百本のたいまつでライトアップする「天橋立 炎の架け橋」(宮津市など実行委主催)が二十日夜行われ、集まった約二万人(主催者発表)の見物客を神秘的なムードで魅了した。

天と地の神が天橋立で結ばれたという恋の伝説「天の浮橋神話」をもとに、一九九四年に始まり、今年で八回目。天橋立の夏のオープニングイベントとして定着している。

抽選で選ばれた結婚前

次々と火を付け、約二・六キロの天橋が炎で約三十分間、浮かび上がった。約五十発の花火も打ち上げられ、見物客らは炎の競演にうっとりとした見とれていた。



天橋立の松並木を炎が鮮やかに浮かび上がらせた
(20日午後7時50分、宮津市天橋立)

夜の庭 ファンタジー



伊能の大図

忠敬も見たかった「炎の架け橋」 200年前の宮津描く



江戸時代後期の測量家、伊能忠敬(二七四—一八一八年)がつくった「大図」と呼ばれる日本地図の写し二百六枚を米国議会図書館で発見した研究グループが二十日までに、写しを撮影した写真のうち、これまで未公開だった二十二枚の公開に応じた。二十二枚に

取められた地域は現在の宮城、愛知、兵庫、京都、徳島など計十九府県にまたがっている。写しは一枚が畳一枚分の大きさ。約二百年前の地名や城、集落が丁寧に書き込まれ、街道や海岸線など測量に用いた線が赤で描かれている。大図は日本列島を二百十四に分け縮尺三万六千分の一で描かれ、近代の全国地図の基になったが、原図は火災などで焼失した。伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表理事は「できれば、各地で大図を原寸大で展示したい」と話している。

研究会渡辺一郎氏提供